

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。夏期講習真っ最中ですね。受験生の皆さんは日々忙しい毎日を過ごしていると思いますが、「できていること」、「できていないこと」をしっかりと整理しながら、実力を伸ばしていく夏にしてほしいと願っています。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありましたが、どのような解答が仕上がったのでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第2問は中世からの出題で「奥州藤原氏政権と源頼朝政権」を考えさせる問題でした。

最近「鎌倉幕府の成立といえは 1192（イイクニ）年が有名だけど、実は…」のように鎌倉幕府の成立時期を捉え直す動きがありますが、今回の問題は源頼朝政権を奥州藤原氏政権と対比させながら鎌倉幕府の成立時期の事情を考えさせていくという、鋭い問題でしたね。

それでは解説を始めていきましょう。

<奥州藤原氏の政権維持の姿勢>

設問

A 奥州藤原氏はどのような姿勢で政権を維持しようとしたか。京都の朝廷および日本の外との関係にふれながら、2行以内で述べなさい。

設問Aで問われているのは「奥州藤原氏はどのような姿勢で政権を維持しようとしたか」ということ。そして、「京都の朝廷および日本の外との関係にふれながら」という条件も与えられています。

さて、奥州藤原氏について言及している資料文は、(1)・(3)・(5)ですが、「京都の朝廷および日本の外との関係にふれながら」という条件について言及しているのは(1)と(5)ですね。まずは資料文(1)です。

(1) 1126年、藤原清衡は、平泉に「鎮護国家の大伽藍」中尊寺が落成した際の願文において、前半では自己を奥羽の蝦夷や北方の海洋民族を従える頭領と呼び、後半では天皇・上皇・女院らの長寿と五畿七道の官・民の安楽を祈願している。

資料文(1)では奥州藤原氏の3代目の清衡が平泉に中尊寺を落成した際の願文が紹介されていますが、この資料文からは「京都の朝廷」・「日本の外」両方との関係が読み取れます。

まず、「京都の朝廷」との関係では「天皇・上皇・女院らの長寿と五畿七道の官・民の安楽を祈願」という表現から、奥州藤原氏が「**京都の朝廷の安泰を願う姿勢**」を示していたことを読み取ることができます。ちなみに中尊寺もわざわざ「鎮護国家の大伽藍」と説明が付されているところからも、そうした奥州藤原氏の朝廷に対する姿勢を読み取れますね。

一方、「日本の外」との関係ですが、「自己を奥羽の蝦夷や北方の海洋民族を従える頭領と呼び」という表現から、奥州藤原氏は奥羽の蝦夷や北方の海洋

強者の戦略

民族、つまり「日本の外」を支配する者として自己を位置付けていることがわかります。ところで「北方の海洋民族」はともかくとして、「奥羽の蝦夷」を「日本の外」としてしまうことには若干の違和感あるかもしれませんが、「奥羽の蝦夷や北方の海洋民族」というように並列されているところから考えて、条件の「日本」＝「京都の朝廷」であり、その「外」＝「服属しない人々」と考えれば、「奥州藤原氏は京都の朝廷に服属しない人々を支配する者として自己を位置付けていた」と整理することができます。次に資料文(5)です

(5) はじめ、奥州の貢物は奥州藤原氏から京都へ直接納められていたが、1186年、頼朝は、それを鎌倉を経由する形に改めさせた。3年後、奥州藤原氏を滅ぼして平泉に入った頼朝は、整った都市景観と豊富な財宝に衝撃を受け、鎌倉の都市建設にあたって平泉を手本とした。

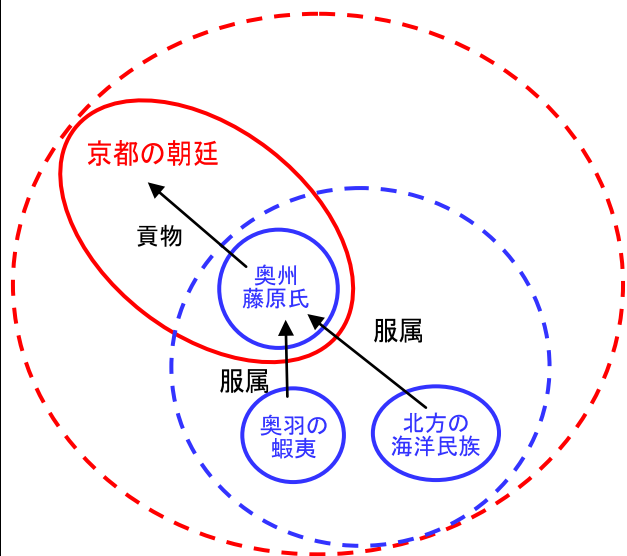
資料文(5)の「はじめ、奥州の貢物は奥州藤原氏から京都へ直接納められていた」という表現から、奥州藤原氏は京都の朝廷に対して貢物を納める関係であったことがわかります。では、奥州藤原氏はどういった理由で貢物を京都の朝廷に納めていたのでしょうか。ここで思い出されるのが、この「東大日本史のみかた」でも何度も紹介した「朝貢」の考え方ですね。つまり、奥州藤原氏は京都の朝廷に貢物を納め服属する姿勢をみせることによって、京都の朝廷の政治秩序に組み込まれ、自身の政権を安定させようとしているわけです。

これを資料文(1)とあわせて考えると、奥州藤原氏は京都の朝廷に服属しない人々を支配する者として自己を位置付ける一方で、朝廷の政治秩序の枠内において政権の安定を図るという姿勢をとっていた、ということになります。

ちなみに資料文(5)には平泉の様子が「整った都市景観と豊富な財宝」という表現で描かれていますが、

ここからも奥州藤原氏政権が地方政権として独特な存在であったことを読み取ることができます。

【京都の朝廷と奥州藤原氏の関係】



※京都の朝廷は、奥州藤原氏を通じて奥羽の蝦夷・北方の海洋民族を観念的な支配下に取り込んでいたと考えられる。

【解答例】

奥州藤原氏は朝廷に服属しない人々の支配者として自己を位置付ける一方で、朝廷の政治秩序の枠内で政権安定を図る姿勢をとった。(60字)

強者の戦略

＜奥州藤原氏滅亡の理由＞

設問

B 頼朝政権が、全国平定の仕上げとして奥州藤原氏政権を滅ぼさなければならなかったのはなぜか。朝廷の動きを含めて、2行以内で述べなさい。

設問Bで問われているのは「頼朝政権が、全国平定の仕上げとして奥州藤原氏政権を滅ぼさなければならなかったのはなぜか」という理由。そして、「朝廷の動きを含めて」という条件が与えられています。

まず、問題文の冒頭に「12世紀末の日本では、西国を基盤とする平氏、東国を基盤とする源頼朝、奥羽を基盤とする奥州藤原氏の3つの武家政権が分立する状態が生まれ、最後には源頼朝が勝利して鎌倉幕府を開いた」という一文があります。これを単純に考えれば、源頼朝が平氏を倒した（これが1185年の壇ノ浦の戦いによって成し遂げられたことは、受験生なら誰でも知っていますね）後に、頼朝に対抗する勢力は奥州藤原氏のみとなり、「**全国平定の仕上げ**」という局面において奥州藤原氏政権を滅ぼさなければならぬことは必然であったということを描く解答を作成することはできます。しかし、それでは「朝廷の動きを含めて」という条件を満たす解答にはなりません。そこで、奥州藤原氏とそれに関連する朝廷の動きを資料文の中から探していきましょう。

(3) 1185年、頼朝は、弟義経の追討を名目に、御家人を守護・地頭に任じて軍事・行政にあたらせる権限を、朝廷にせまって獲得した。その後義経は、奥州藤原氏のもとへ逃げこんだ。

資料文(3)では平氏滅亡後の頼朝と義経の対立が描かれていますが、その兄弟の対立の間にあった人物として後白河法皇の名前がすぐに浮かぶのではな

いでしょうか。当初、後白河法皇は頼朝追討を命じたものの、資料文(3)にあるように、源頼朝にせまれ義経追討へと傾いていきます。そんななかで義経は奥州藤原氏のもとへと逃げ込むのですが、そこには奥州藤原氏と朝廷の独自の結びつきが背景にあったのではないかと考えられます（設問Aでも奥州藤原氏政権と京都の朝廷には歴史的に独自の関係性があったことが確認できましたね）。

つまり、**頼朝の勢力拡大に抵抗した朝廷と、同じく頼朝に対抗する奥州藤原氏が結びつくことは頼朝にとって好ましくなく、そこに奥州藤原氏政権を滅ぼす理由があったのではないかと**考えられるわけですね。ちなみに資料文(5)には「はじめ、奥州の貢物は奥州藤原氏から京都へ直接納められていたが、1186年、頼朝は、それを鎌倉を経由する形に改めさせた」という一文があり、1186年の段階において、頼朝が奥州藤原氏と京都の朝廷が直接関係を持つことを嫌っていたことを裏付けることができます。

【解答例】

奥州藤原氏は頼朝政権に対抗する勢力であり、また頼朝政権の勢力拡大に抵抗した朝廷とも独自の結びつきをもっていたから。(57字)

強者の戦略

<最初の安定した武家政権となった頼朝政権>

設問

C 平氏政権と異なって、頼朝政権が最初の安定した武家政権（幕府）となりえたのはなぜか。地理的要因と武士の編成のあり方の両面から、3行以内で述べなさい。

設問Cで問われているのは「頼朝政権が最初の安定した武家政権（幕府）となりえたのはなぜか」という理由。そして、「地理的要因と武士の編成のあり方の両面から」という条件が与えられています。また「平氏政権と異なって」とありますので、平氏政権との比較も忘れてはいけません。

まず「地理的要因」から考えていきましょう。平氏政権との比較で言うならば、平氏政権はその中心を京都（六波羅）に置いたことに対し、頼朝政権は東国（鎌倉）をその中心としました。その違いは朝廷との距離となりますが、**頼朝政権が朝廷から距離を置いていた**というだけで「安定した武家政権」になるのかと言われれば少し疑問が残ります。そこで資料文(2)をみてみましょう。

(2) 1180 年、富士川で平氏軍を破り上洛しようとする頼朝を、東国武士団の族長たちは、「東国の平定が先です」と言って引き止め、頼朝は鎌倉に戻った。

資料文(2)では富士川の戦いの後の頼朝の動きが描かれており、そもそも何故頼朝が東国（鎌倉）を拠点とすることになったのか、その理由の一端を垣間見ることができます。

頼朝は当初、上洛しよう（＝京都の朝廷に近づこう）としたわけですが、それを東国武士団によって引き止められ、鎌倉に戻った（＝京都の朝廷から距離を置いた）のです。しかし、それが結果としては頼朝政権を「安定した武家政権」としたわけでは

ないので、ここで注目されるべきは「東国の平定」というフレーズでしょう。つまり、**頼朝政権は東国の平定を実力行使によって進める一方で、東国武士団の所領の安堵を図り主従関係を形成していったことが、平氏政権とは異なって「安定した武家政権」となっていた理由**と考えることができます。

次に、「武士の編成のあり方」を考えていきましょう。ここで注目したいのは、資料文(3)と(4)です。

(3) 1185 年、頼朝は、弟義経の追討を名目に、御家人を守護・地頭に任じて軍事・行政にあたらせる権限を、朝廷にせまって獲得した。その後義経は、奥州藤原氏のもとへ逃げこんだ。

(4) 地頭は平氏政権のもとでも存在したが、それは朝廷の認可を経たものではなく、平氏や国司・領家が私の「恩」として平氏の家人を任じたものだった。

資料文(3)と(4)には共通して「**地頭**」という用語が出てきています。しかし、平氏政権と頼朝政権では、その内容が異なることが読み取れますね。平氏政権における「地頭」は「**朝廷の認可を経たものではなく**、平氏や国司・領家が私の「恩」として平氏の家人を任じたもの」であるのに対して、頼朝政権における「地頭」は「**弟義経の追討を名目に、御家人を守護・地頭に任じて軍事・行政にあたらせる権限を、朝廷にせまって獲得した**」とあるように「**朝廷の認可を経て獲得したもの**」であることがわかります。つまり、頼朝政権の武士の編成は（地理的要因のところでも述べたように）、**「東国の平定を実力行使によって進める一方で、東国武士団の所領の安堵を図り主従関係を形成」**することによってなされるだけではなく、それを「**朝廷の認可**」によって**公的なものへと整備していった**というところにその特徴があったのです。

強者の戦略

【解答例】

頼朝政権は朝廷から距離を置き、東国の平定を實力行使によって進める一方、朝廷の認可を受けながら東国武士団の所領の安堵を図り主従関係を形成することで、朝廷と安定した関係を確保したから。(90 字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。
この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送っててくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！